

学位論文要旨

対人的文脈における防衛的悲観主義  
——課題関連場面からの拡張——

広島大学大学院教育学研究科  
教育学習科学専攻 心理学分野  
D175900 清水 陽香

## 目 次

- 第 1 章 本研究の背景と目的
  - 第 1 節 防衛的悲観主義とは
  - 第 2 節 対人的文脈における防衛的悲観主義
  - 第 3 節 本研究の目的
- 第 2 章 認知的方略と場面による熟考内容の異同(研究 1)
  - 第 1 節 方法
  - 第 2 節 結果と考察
- 第 3 章 防衛的悲観主義が対人的文脈での準備に及ぼす影響(研究 2)
  - 第 1 節 研究 2-1
  - 第 2 節 研究 2-2
- 第 4 章 防衛的悲観主義と熟考内容の操作が他者からの評価に及ぼす影響(研究 3)
  - 第 1 節 方法
  - 第 2 節 結果と考察
- 第 5 章 防衛的悲観主義が対人関係形成に及ぼす影響(研究 4)
  - 第 1 節 方法
  - 第 2 節 結果と考察
- 第 6 章 認知的方略による顕在的自尊心と潜在的自尊心の差異(研究 5)
  - 第 1 節 研究 5-1
  - 第 2 節 研究 5-2
- 第 7 章 総合考察
  - 第 1 節 本研究の成果
  - 第 2 節 学術的意義
  - 第 3 節 実践的意義
  - 第 4 節 本研究の限界点と今後の課題
- 引用文献

## 第 1 章 本研究の背景と目的

### 第 1 節 防衛的悲観主義とは

悲観主義は健康面や学業成績など、人のさまざまな側面に悪影響を及ぼす(e.g.,Scheier & Carver, 1985)。しかし, Norem & Cantor(1986)は, 学業場面において悲観的, すなわち悪い結果を予測するにもかかわらず, 楽観主義者と同程度に高いパフォーマンス(i.e., 学業成績)を示す個人がいることを指摘し, 彼らの用いる認知的方略を防衛的悲観主義(Defensive Pessimism; DP)と呼んだ。DP は, 重要な学業場面に直面した際, 過去に同様の状況で成功しているにもかかわらず, 自身のパフォーマンスに対し低い期待を持つという認知的方略である。DP を用いる個人(DP 者)は, 目前のパフォーマンスに対して高い不安を感じ, そこで何が起こりうるかについて, 失敗する場合を含むあらゆる可能性を熟考する。そして, 想定した失敗を避けるために十分な準備を行い, 結果的には過去と同様に高いパフォーマンスを示す(Norem, 2001)。

一方, DP と対照的に, 過去の成功に一致した高い期待を持つという認知的方略を方略的楽観主義(Strategic Optimism; SO)と呼ぶ。先行研究から, SO を用いる個人(SO 者)は, 自身のパフォーマンスに対して不安を感じず, 熟考も行わないが, 必要な準備を行うことで高いパフォーマンスを示すことが明らかになっている(e.g., Norem & Illingworth, 1993)。

また Norem (2001)は, 過去のパフォーマンスが低く将来のパフォーマンスへの期待も低い認知的方略を真の悲観主義(Realistic Pessimism; RP), 過去のパフォーマンスは低い期待が高い認知

的方略を非現実的楽観主義(Unjustified Optimism; UO)と呼び、それぞれを用いる個人を RP 者，UO 者と呼んだ。

## 第 2 節 対人的文脈における防衛的悲観主義

先行研究では，主に課題関連場面での DP 者の認知・行動パターンについて，課題に対する不安や熟考，準備，およびパフォーマンスの観点から検討が行われており，その比較対象は SO 者であった(e.g., Norem & Cantor, 1986)。しかし，悲観性がさまざまな場面で人にネガティブな影響をもたらすことへの反証として DP が提唱されたことを考慮すれば，先行研究(e.g., 高比良, 1988)の中で課題関連領域と並んで重要な領域とされる，対人的文脈での検討が乏しいことは学術的に問題である。

その中で Showers (1992)は，DP 者は目前の会話において失敗する可能性について考えた方が，成功する可能性について考えた場合よりも会話の相手から高く評価されることを明らかにした。これは課題関連場面での DP 者の認知・行動パターンと整合するものであり，そのパターンが対人的文脈にまで拡張できる可能性を示唆している。もし文脈に依らない DP 者の認知・行動パターンを明らかにすることができれば，DP 研究における学術的な問題が解決されるだけでなく，DP 者と同様に不安が高い，あるいは悲観的思考によって不適応に陥りやすい個人への介入研究に展開する道筋が提供できる。その点において，DP の対人的文脈への拡張可能性を検討することは重要な意味を持つ。

## 第 3 節 本研究の目的

以上を踏まえ，本研究では主に対人的文脈に着目した調査・実験的検討を行う。具体的には，まず DP 者が場面にかかわらず同

様の認知・行動パターンを示すかどうかについて、対人/学業場面における熟考内容を比較することで検証する(研究 1)。次に、DP 者は対人的文脈でどのような準備を行うのかを明らかにするため、DP 傾向と初対面の他者との会話場面における行動意図との関連を検討する(研究 2)。その上で、どのような内容の熟考が DP 者の対人的文脈におけるパフォーマンスを高めるのかについて、初対面の他者との会話前の思考内容を操作することによって検討する(研究 3)。さらに、対人関係の変化に着目した検討を通して、長期的な対人関係への影響も明らかにする(研究 4)。最後に研究 5 では、なぜ DP 者は不安が高いにもかかわらず目の場面に向けて準備ができるのか、という研究 1 から 4 で残されている問いへの示唆を得るために、潜在的自尊心という新たな観点からの検討を行う。

## 第 2 章 認知的方略と場面による熟考内容の異同(研究 1)

### 第 1 節 目的

DP 者は目の課題への熟考を妨げられると課題成績が低下するのに対して、SO 者は熟考するように促されると成績が低下する(e.g., Norem & Illingworth, 1993)。この知見は、パフォーマンスに至るプロセスの中で熟考が重要な役割を担うことを示している。研究 1 では DP 者の熟考が場面によらず類似したパターンを示すことを確認するため、場面想定法を用いて対人場面と学業場面の熟考内容を比較する。

### 第 2 節 方法

**参加者** 四年制大学生 122 名(男性 39 名, 平均年齢 21.1 歳,  $SD = 0.5$ )が調査に参加した。

**質問紙** 認知的方略の分類のために J-DPQ (Hosogoshi & Kodama, 2005)を用いた。続いて, 対人関連と課題関連の重要な場面を呈示した。対人場面では, 「人とのかかわりに関する重要な場面(例: スピーチ, 就職面接, 初対面の人との会話など)」を想像するよう求めた。また学業場面では, 「勉強に関する重要な場面(例: 大学の試験, レポート提出など)」を想像するよう求めた。各場面の呈示後, その場面での熟考の内容を測定した。熟考内容の測定には, 外山(2015)の尺度のうち, 「失敗に対する予期・熟考」「成功に対する熟考」「計画に対する熟考」を用いた。

### 第 3 節 結果と考察

判別項目と J-DPQ の尺度得点の平均値に基づき参加者の認知的方略を分類した(Hosogoshi & Kodama, 2005; Norem, 2001)。欠損値のなかった 118 名について, DP 者 34 名・SO 者 41 名・RP 者 24 名・UO 者 19 名に分類された。3 つの熟考内容それぞれの因子得点について, 認知的方略 4(DP/SO/RP/UO)×場面 2(学業/対人)の 2 要因分散分析を行った。その結果, 失敗に対する予期・熟考および計画に対する熟考(Figure 1)において, 想定通り認知的方略の主効果が認められた。しかし, 同時に場面との交互作用も認められた。DP 者と SO 者において熟考の程度に差があるという傾向が, 学業場面における計画に対する熟考を除いて認められた。

研究 1 の結果は, 熟考に関する DP 者の特徴が対人場面で顕著にあらわれることを示している。社会的動物である人間にとって, 対人場面での失敗はリスクが大きい (e.g., Baumeister & Leary,

1995)。それゆえに、学業場面よりも対人場面において、DP 者の熟考における特徴がより強調されたと考えられる。

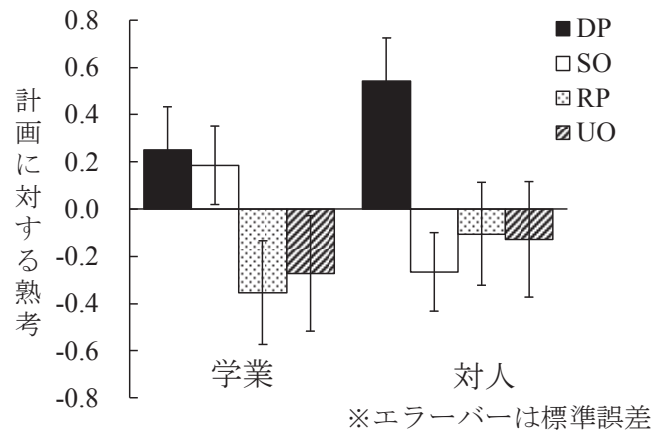


Figure 1. 認知的方略および場面による計画に対する熟考の差異

### 第 3 章 防衛的悲観主義が対人的文脈での準備に及ぼす影響 (研究 2)

DP 者の対人的文脈での準備について、研究 2 では複数の初対面の他者との会話場면을題材に、行動意図の観点から検討する。

#### 第 1 節 研究 2-1

##### 方法

**参加者および手続き** 女子短期大学生 202 名(平均年齢 19.4 歳,  $SD = 1.1$ )を対象に、場面想定法による質問紙実験を実施した。

**質問紙** 防衛的悲観主義尺度(宮近, 2005)を用いた。得点が高いほど DP 傾向が強いこと、得点が低いほど SO 傾向が強いことを示す(Norem, 2001)。他に対人行動に影響する個人特性として、自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)と特性シャイネス尺度(相川, 1991)を用いた。

各尺度への回答後，初対面の他者との相互作用場面(就職先の内定者の顔合わせ会)に関するシナリオを呈示した。次いで，この場面での状態不安を STAI 日本語版(清水・今栄，1981)により測定した後，KISS-18(菊池，1988)などを参考に自作した 22 項目を用いて同場面での行動意図を測定した。

### 結果と考察

各尺度の尺度得点を作成し，個人特性，状態不安，行動意図について，構造方程式モデリングに基づくパス解析を実施した (Figure 2)。その結果，DP 傾向は状態不安と正の関連を示す一方で，周囲の反応に合わせるような反応志向的かかわりや，他者の意見を尊重するような尊重的かかわりとも正の関連を示した。

対人場面においても DP は不安の高さにつながるだけでなく，他者との円滑なコミュニケーションに繋がるような行動意図と関連することが示された。これは DP 者が他者から否定的に評価されることを避けるための準備を行うことを示唆している。

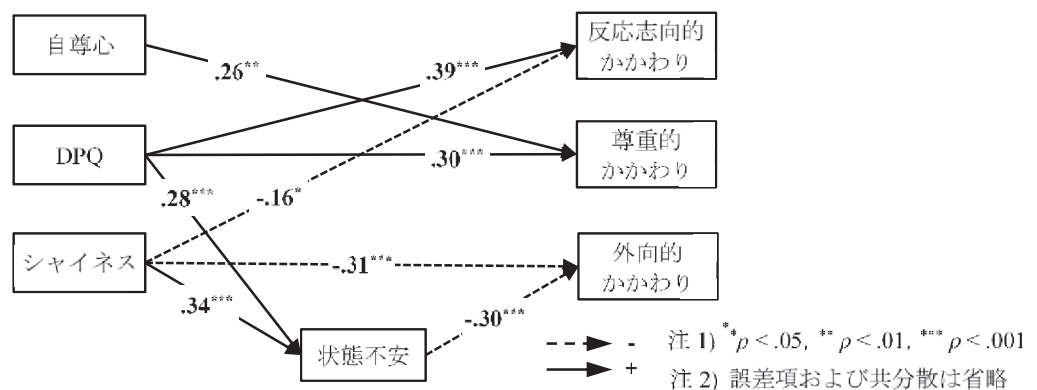


Figure 2. DP 傾向と状態不安，行動意図の関連 (CFI = .96, RMSEA = .09)

### 第 2 節 研究 2-2

研究 2-2 では，研究 2-1 の結果が再現されることを確かめるため，日本人 337 名(男性 170 名，平均 30.8 歳， $SD = 5.0$ )を対象に



Web 調査を実施した。認知的方略 4 群の特徴に関する示唆を得るため、認知的方略尺度として J-DPQ (Hosogoshi & Kodama, 2005) を用い、さらに社会的スキルの測定のため KISS-18 (菊池, 1988) を追加した。パス解析の結果、DP 傾向と状態不安、行動意図の関連について研究 2-1 の結果が再現された。

#### 第 4 章 防衛的悲観主義と熟考内容の操作が他者からの評価に及ぼす影響 (研究 3)

研究 3 では、会話前の熟考の内容を操作した上で、初対面の他者との会話実験を行い、認知的方略と熟考の内容が DP 者への他者評価に及ぼす影響について検討する。

Showers(1992)は、初対面の他者(実際には実験協力者)との会話の前に、会話で失敗する可能性を考えた DP 者の方が、成功する可能性を考えた DP 者よりも後の会話の相手から高く評価されることを明らかにした。しかし、Showers(1992)には統制条件が含まれておらず、失敗する可能性を考えること自体が他者からの高い評価へとつながったのか、成功する可能性を考えることがそれを阻害したのかは明らかになっていない。DP 者が失敗を避けるために準備すること (Norem, 2001)を考慮すれば、失敗する可能性について考えることが重要だと考えられる。しかし、この検証のためには、操作によって失敗する可能性に注目させる場合の方が、操作を行わない場合よりも他者から肯定的に評価されることを示す必要がある。そこで研究 3 では、統制条件と失敗する可能性について考えるネガティブ条件を設定し、比較検討を行う。

## 第 1 節 方法

### リクルーティングおよびスクリーニング

**参加者および手続き** 四年制大学生 236 名(男性 100 名, 平均年齢 20.1 歳,  $SD = 3.3$ )が質問紙調査に参加した。同質問紙上で会話実験への参加を求めた。

**質問紙** 認知的方略の分類のため J-DPQ(Hosogoshi & Kodama, 2005)に, そして共変量として扱うために自尊感情尺度(山本他, 1982)に回答を求めた。

### 実験

**参加者および手続き** DP 者 23 名, SO 者 18 名が実験に参加した。平均年齢は 20.0 歳( $SD = 1.1$ )であった。参加者は, ネガティブ条件あるいは統制条件に無作為配置された。

実験手続きは Showers(1992)に準じた。参加者に対して, これから初対面の他者と会話すること, 会話の相手は別室で説明を受けていることを教示した。次に, ネガティブ条件では, 思考内容の操作のための質問紙に回答するよう求めた。統制条件では数分間待機するよう求めた。その後, 実験者が参加者と同性の会話相手(実際には実験協力者)を実験室に同伴し, 約 10 分間互いをよく知り合うために会話するよう教示して退室した。実際には 5 分後に再度入室し, 参加者と実験協力者の両方に会話後の質問紙に回答するよう求めた。回答終了後, ディブリーフィングを行い, 実験を終了した。なお, 実験協力者は実験の目的を知らない男性 3 名, 女性 2 名であった。

**条件操作** ネガティブ条件において参加者の思考内容を操作するため, 会話の中で起こりうる失敗に関する 34 項目(e.g., 「何

を言うべきか分からない」)を作成した。参加者は、各項目が後の会話の中でどの程度起こりうると思うかを評価した。

**会話後の質問紙** 実験協力者には会話全体について評価する 7 項目(e.g.,「会話は順調に進みましたか」), および参加者の印象を評価する 11 個の形容詞対(e.g.,「リラックスした－緊張した」)に回答を求めた。一方, 参加者には会話時の自身の行動について評定するよう求めた。この評定には, 研究 2 の行動意図項目から実験場面に適用可能な項目を抜粋して用いた。

## 第 2 節 結果と考察

協力者による会話に関する評価項目それぞれについて, 認知的方略 2(DP/SO)×条件(ネガティブ/統制)の 2 要因共分散分析(共変量:自尊心)を実施した。その結果, 参加者が話しかけてきた程度において交互作用が有意であった。ネガティブ条件の DP 者の方が, 統制条件の DP 者, およびネガティブ条件の SO 者よりも協力者によく話しかけたと評価された。また, 協力者による参加者の印象評価についても同様の分析を行った。その結果, 「リラックスした－緊張した」において交互作用が有意であった。ネガティブ条件の DP 者の方が, 統制条件の DP 者, およびネガティブ条件の SO 者よりもリラックスしていたと評価された。

以上より, 事前に失敗する可能性について考えることが, DP 者の対人的文脈におけるパフォーマンスを高めることが示された。

## 第 5 章 防衛的悲観主義が対人関係形成に及ぼす影響(研究 4)

研究 4 では, DP が友人関係の構築・維持といった長期的な対

人プロセスに及ぼす影響を検討するために、大学新入生を対象とした縦断調査を実施する。

## 第 1 節 方法

**参加者および手続き** 四年制大学の 1 年生 93 名(男性 65 名)を対象に縦断調査を実施した。Time 1 の調査を 4 月、Time 2 を 7 月に行った。Time 2 時点での参加者の平均年齢は 18.5 歳( $SD = 0.7$ )であった。

**質問紙** Time 1 では、個人特性として J-DPQ(Hosogoshi & Kodama, 2005)、自尊感情尺度(山本他, 1982)、特性シャイネス尺度(相川, 1991)に加え、社会的スキルを測定した(KISS-18; 菊池, 1988)。その後、大学内でよく話をする友人(人数制限なし)のインシヤルの記入を求め、それらの友人との関係満足度を 1 項目で測定した。さらに、関係継続意思(木村・磯・大坊, 2012)と対人摩耗(橋本, 2005)を測定した。対人摩耗とは「日常のコミュニケーションにおいて頻繁に起こる、社会規範からさほど逸脱したものではないが配慮や気疲れを伴う対人関係がストレスをかけている状態」である(橋本, 1997)。DP 者が特定の行動意図(e.g., 尊重的にかかわり)に即した行動を実際に示すのであれば、それが対人摩耗につながる可能性があるため、対人摩耗を測定した。

Time 2 では、研究 2 と同様の尺度を用い、大学入学後 3 か月間で友人と話した際の状態不安と行動を測定した。その後、Time 1 と同様の項目(ただし、個人特性を除く)に回答を求めた。

## 第 2 節 結果と考察

個人特性、Time 2 の不安と行動、そして友人関係関連の指標の変化量について、構造方程式モデリングに基づくパス解析を行っ

た(Figure 3)。友人関係関連指標については、Time 2 の得点を目的変数、Time 1 の得点を説明変数とする単回帰分析を実施し、残差得点を変化量として使用した。その結果、DP 傾向は大学入学後 3 か月間の状態不安と正の関連を持つと同時に、周囲の反応に合わせる反応尊重的かかわりとも正の関連を示した。さらに、反応尊重的かかわりは、対人摩耗の変化量と正の関連を示した。

研究 4 の結果より、研究 2 で DP 傾向との関連が示された行動意図が、他の個人特性の影響を統制してもなお、関係構築場面での行動として生起することが示された。しかし同時に、そのような行動の積み重ねが精神的な疲労に繋がることも示された。長期的な対人プロセスに着目した場合、DP が必ずしも恩恵をもたらすとは言えないと考えられる。

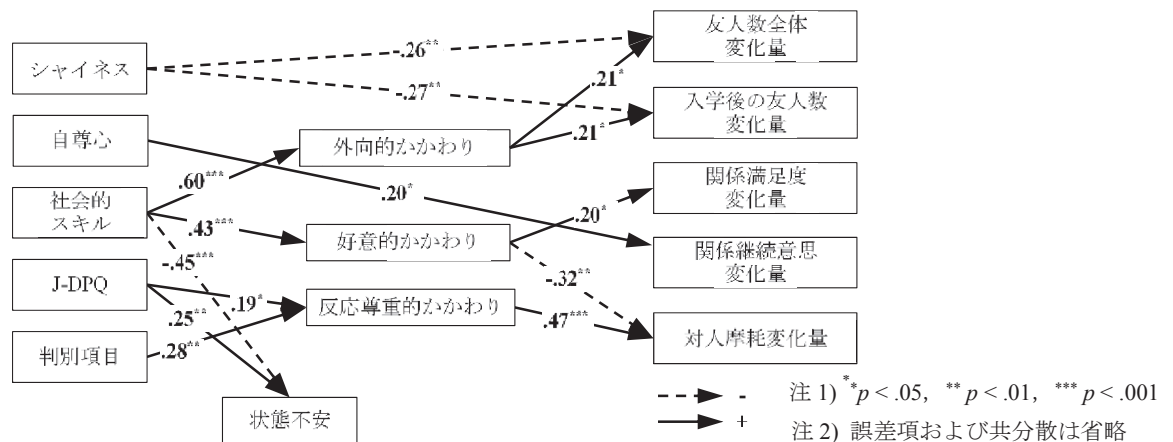


Figure 3. 認知的方法と状態不安、行動、友人関係の関連(CFI=1.00, RMSEA=.00)

## 第 6 章 認知的方法による顕在的自尊心と潜在的自尊心の差異 (研究 5)

研究 1 から 4 より、DP 者は課題関連場面だけでなく、対人的文脈においても、高い不安を感じつつ、対人関係上の準備を行う

ことが明らかになった。しかし、顕在的自尊心(Explicit self-esteem; ESE)が低い(e.g., Norem, 2001), 言いかえれば自分に自信がなく, 効力感が低いにもかかわらず, DP 者が準備を行えるのはなぜであろうか。この問いについて, 研究 5 では顕在的自尊心(ESE)と潜在的自尊心(Implicit self-esteem; ISE)の観点から検討する。具体的には, DP 者は顕在的には自己評価が低いものの, 非意識的(潜在的)には自己評価が高い可能性について検討する。

### 第 1 節 研究 5-1

DP 者の ESE は, SO 者に比べて低いことが示されている(e.g., Norem, 2001)。しかし, RP 者・UO 者と比較した先行研究は存在しない。そこで研究 5-1 では, ESE について認知的方略の 4 つのタイプ間での比較を行う。

#### 方法

**参加者および手続き** 女子短期大学生 98 名(平均年齢 19.8 歳,  $SD = 3.5$ )を対象に質問紙調査を実施した。

**質問紙** J-DPQ(Hosogoshi & Kodama, 2005), 自尊感情尺度(山本他, 1982)を用いた。

#### 結果と考察

回答に不備のあった参加者を除き, DP 者 20 名, SO 者 24 名, RP 者 27 名, UO 者 25 名に分類された。ESE について 1 要因分散分析を実施した結果, DP 者, RP 者, UO 者は SO 者より低い ESE を示した。DP 者と SO 者における ESE の差異は, 先行研究の知見(Norem, 2001)に一致する結果であった。

### 第 2 節 研究 5-2

#### 方法

**参加者および手続き** 四年制大学生 161名(男性 55名, 平均年齢 20.1歳,  $SD = 1.8$ )を対象に質問紙調査を実施した。

**質問紙** J-DPQ(Hosogoshi & Kodama, 2005)を使用した。ISEの測定には Name Letter Task(NLT; Nuttin, 1985)を用いた。NLTは, 自身のイニシャルに含まれるアルファベットへの好意度とそれ以外のアルファベットへの好意度の差によって ISE を測定するものである。

### 結果と考察

回答に不備のあった参加者を除き, DP者 55名, SO者 47名, RP者 23名, UO者 33名に分類された。NLT得点について1要因分散分析を実施した結果, DP者とSO者はRP者に比べてISEが高いことが示された(Figure 4)。

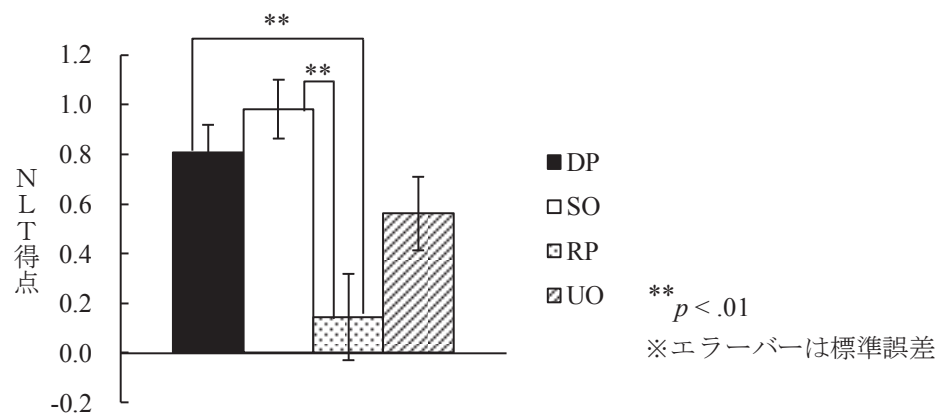


Figure 4. 認知的方略によるNLT得点の差異

研究 5-1 と 5-2 の結果より, DP 者の ESE は SO 者より低いものの, ISE は SO 者と同程度に高いと考えられる。この ISE の高さが, DP 者が不安を抱えながらも事前の準備に勤しむことを可能にしていることが示唆される。

## 第7章 総合考察

### 第1節 本研究の成果

本研究では，課題関連場面から対人的文脈に展開する形で DP 者の認知・行動パターンを包括的に理解することを目指し，主に対人的文脈において複数の観点から検討を行った。研究1から5より，DP 者は対人的文脈においても高い不安を感じることで，目の前の場面で何が起こりうるかについて考えること，また適切な準備を行うこと，失敗について考えることで他者から肯定的に評価されることが明らかになった。したがって，課題関連場面における DP 者の認知・行動パターンを対人的文脈に拡張できることが示された。さらに，DP 者が高い不安に反した高パフォーマンスを示す背景の1つとして，高い ISE の存在があることが示唆された。以上の知見から構築されたモデルを Figure 5 に示す。

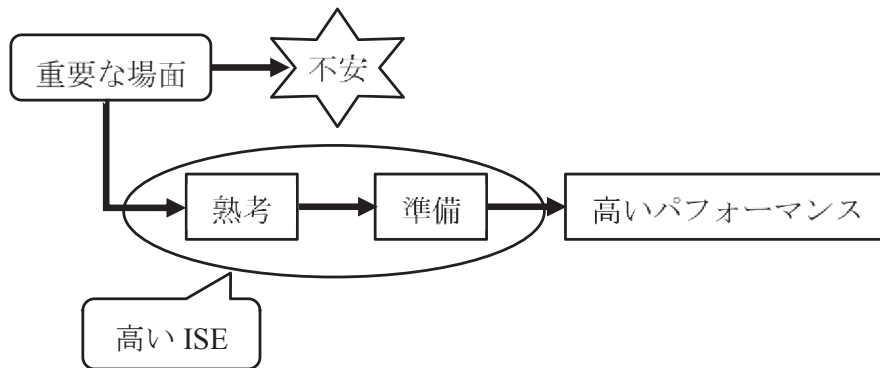


Figure 5. 重要場面における DP 者の認知・行動パターンモデル

### 第2節 学術的意義

文脈に依らない認知・行動パターンについてのモデルが構築されたことにより，学校や組織といった，課題関連場面とも対人的文脈とも解釈できる状況での人の社会的行動を予測することが



可能になった。より広範な文脈における行動の説明や予測に貢献する点で、本研究には一定の意義があると言える。

### 第3節 実践的意義

本研究の知見から、不安の高さや悲観的思考によって心理的適応が阻害されている人々に対し、ISEを高める介入や計画的熟考を身につけさせる介入が有効な可能性が示唆される。ただし、実際の介入方法については今後の検討が必要である。

### 第4節 本研究の限界点と今後の課題

まず、Figure 5が各研究の知見に基づいて構築されたものであることから、今後は不安からパフォーマンスという流れ全体を検証し、そこでISEがどのような役割を担うのか明らかにする必要がある。次に、RP者やUO者に関する特徴が十分に明らかにされたわけではないことから、そのための知見を蓄積するとともに、必要に応じて効果的な介入方法を考案する必要がある。

## 引用文献

相川 充(1991). 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62, 149-155.

Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.

橋本 剛(1997). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, 13, 64-75.

橋本 剛(2005). 対人ストレスサー尺度の開発 人文論集, 56,

A45-A71.

Hosogoshi, H., & Kodama, M. (2005). Examination of defensive pessimism in Japanese college students: Reliability and validity of the Japanese version of the defensive pessimism questionnaire. *Japanese Health Psychology, 12*, 27-40.

菊池章夫(1988). 思いやりを科学する 川島書店

木村昌紀・磯友輝子・大坊郁夫(2012). 関係に対する展望が対人コミュニケーションに及ぼす影響——関係継続の予期と関係継続の意思の観点から—— 実験社会心理学研究, 51, 69-78.

宮近愛未(2005). 防衛的悲観主義が精神的不健康を引き起こす要因の検討 広島大学総合科学部総合科学科 卒業論文

Norem, J. K. (2001). Defensive pessimism, optimism, and pessimism. In E. C. Chang (Ed.), *Optimism and pessimism: Implications for theory, research, and practice* (pp. 77-100). Washington DC: American Psychological Association Press.

Norem, J. K., & Cantor, N. (1986). Anticipatory and post hoc cushioning strategies: Optimism and defensive pessimism in “risky” situations. *Cognitive Therapy and Research, 10*, 347-362.

Norem, J. K., & Illingworth, K. S. S. (1993). Strategy dependent effects of reflecting on self and tasks: Some implications for optimism and defensive pessimism. *Journal of Personality and Social Psychology, 65*, 822-835.

Nuttin, J. M., Jr. (1985). Narcissism beyond Gestalt and awareness: The name letter effect. *European Journal of Social Psychology, 15*, 107-116.

15, 353-361.

Scheier, M. F., & Carver, C. S. (1985). Optimism, coping, and health: Assessment and implications of generalized outcome expectations. *Health Psychology, 4*, 219-247.

清水秀美・今栄国晴(1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究, 29, 62-67.

Showers, C. (1992). The motivational and emotional consequences of considering positive or negative possibilities for an upcoming event. *Journal of Personality and Social Psychology, 63*, 474-483.

高比良美詠子(1988). 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用)の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, 14, 12-24.

外山美樹(2015). 認知的方略尺度の作成および信頼性・妥当性の検討——熟考の細分化を目指して—— 教育心理学研究, 63, 1-12.

山本真理子・松井 豊・山成由紀子(1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

柳澤邦昭・西村太志・浦 光博(2010). 低自尊心者は身近な人しか選べないのか——他者選択に特性自尊心およびコミュニケーションの質が及ぼす影響—— 実験社会心理学研究, 50, 89-102.